

目次:

1. 学修支援と教育支援：CTLの2つの機能について	1
2. FD活動レポート	
- 日本とフィリピンを繋ぐ理解の架け橋を築く	4
3. 役立つICTツール	
- Moodle 3 新機能のご紹介	8
4. セミナー研修レポート	
- OXFORD EMI トレーニングプログラムの開催	10
5. コラム	
- スマートフォン - 「Out of Sight, Please!」	13
6. 新任教員紹介	15
7. 編集後記	20

学修支援と教育支援：CTLの2つの機能について

学修・教育センター（CTL）は、「学生/教員が、いつでも気軽に相談できる、必要な支援を受けられる、学修・教育支援の改善に参加できる場所」を作るという目的でスタートしました。学生の学修支援と教員の教育活動の支援の両方を同じ組織の下で行うのはICUのCTLの特徴でもあります。学生と教員の両方の視点から改善点などが見えてくるといったメリットもあります。前号に続き、CTLのサービスについて、今号では学修支援と教員支援の二つの側面からご紹介させていただきます。



学修・教育センター(CTL)の機能



■CTLの学修支援

CTLの機能はいくつかありますが、学生サポー

トの役割の一つである「学修支援」についてご紹介します。2018年4月、学修・教育センターは多様な学生の個別のニーズや課題に寄り添ったサポートを目指し、学生の学びの場所のひとつであるオスマー図書館1階に場所を移しました。移転に伴い、従来図書館の傘下にあった[ライティングサポートデスク](#)も所属が変わり、学修・教育センターで学修支援を担うこととなりました。また、ダイアログハウス2階に位置していたアカデミックプランニング・センターもオスマー図書館へ移動し名称を[アカデミックプランニング・サポート](#)と変更しました。さらに、学修に困難を抱えた学生を状況に応じて支援している[チュートリアルサポート](#)、英語による卒業論文執筆を支援する[アカデミックイングリッシュサポート](#)など、今まで点にしていた学修支援機能が学修支援オフィスとして統合され学びの環境が整いつつあります。

学修支援をその機能から考えると「学びの枠組み」への支援と「学びの内容」への支援とに分けられます。このたび図書館に移転したので、あえて図書館にかけてその機能を喩えるとすると、枠組みは「本棚」、内容は「本」というイメージに置き換えられるでしょうか。「本」は乱雑に並べられていては、必要な時に必要な「本」にたどりつきません。「本棚」という枠のなかで、使いやすいように「本」を並べることで、取り出しやすく、そ

の内容は読み手に届き、「本」の機能が発揮できる。学修・教育センターにおける学修支援は、ICUの学びにおいて「本棚」と「本」のような関係を担っていきたいと考えています。

「学修支援」のなかで、履修計画やメジャー選択など「学びの枠組み」の支援を担うのはアカデミックプランニング・サポート（旧アカデミックプランニング・センター）です。それぞれの学生が自らの「本棚」の「本」を体系立てて並べたり、時には違う本棚を覗いたりしながら並べ替えることで、「ICUでの学び」を自分仕様に整えていくサポートをしています。アカデミックプランニング・サポートでは相談内容に応じてアドヴァイジングスタッフ、あるいはピア・アドヴァイザーのICU Brothers and Sisters（IBS）が、学生一人ひとりを主体的な学修へと導く支援を行っています。移転してオープンな環境となったことでちょっとしたことでも相談しやすい雰囲気となり、記録をつけている相談数だけを見ても倍以上と急増しています。



IBS (ICU Brothers and Sisters)

「学びの内容」への支援は、「本」にさまざまなジャンルがあるように多種多様です。学生がどんな支援を求めているかによって支援内容や方法が異なりますが、アカデミックプランニング・サポートと情報を共有することができるようになったことで、学修計画も視野に入れた上でのさまざまな段階での支援が可能となったと考えています。



ライティングサポートデスク

ライティングサポートデスクでは、大学院生がチューターとなり「学生の論文作成能力向上」をめざしています。利用方法は、事前の予約制と、決まった時間帯にチューターが常駐し必要なときに自由に利用できる Walk-in の二種類の形態で運営しています。2018 年度春学期の利用者は、昨年度の同時期と比較して約 1.5 倍に、特に Walk-in の利用率は 2 倍以上に伸びています。これは、セッションブースが学修・教育センターの入口正面に配置されオープンな環境になり気軽に利用できる雰囲気になったことも一つの要因でしょう。

特別学修支援室からの要請を受けて始めたチュートリアルサポートは、2018 年 4 月より対象範囲を広げ学修に困難を感じ支援を希望する学生も利用できるよう環境を整備しました。支援にあたっては、課題やレポート作成に向けた学修環境作りを柱として、段階的に学修における困りごとを解決できるよう柔軟な対応を心がけています。



チュートリアルサポート

アカデミックイングリッシュサポートは、英語による卒業論文執筆を支援するプルーフリード支援で、2016年11月よりサービスを開始しました。専門のプルーフリーダーが対応する面談つきプルーフリーディングとメールによるプルーフリーディングの二種類のサービスを提供しています。卒論提出時期に合わせた期間限定のサービスであり、メール対応は3月卒業生に限られます。

また、2018年4月より学修に何らかの困難をおぼえ、成績の伸び悩む学生の面接を、学修・教育センター副センター長が行なうことになりました。学修・教育センターが関わることで、教員のアドヴァイジングの状況、学生の学修の状況に関する情報を把握することができ、学生サイドと教員サイドの両面から包括的な支援を行うことを目指しています。支援方法は、その学生がどこでつまづいているかによって異なりますが、学生のニーズを正確に把握し段階的に効果的な支援と結びつけることが、学生の困りごとの解消と学修成果に繋

がっていきます。今後、学修・教育センターが提供するさまざまな支援を組み合わせ、新たな一歩を提示していけたらと思います。

■CTL の教育支援

次に CTL のもう一つの大きな役割「教育支援」についてご紹介させていただきます。

教員からの相談を受ける「窓口機能」は、オフィスがオスマー図書館1階に移動してきたことにより、利用のハードルが下がったのではないかと感じています。図書館に来館した教員が CTL オフィスにふらりと立ち寄り、木製のカウンターに寄りかかりながら相談をしていく様子はまさに当初より CTL が目指していた光景であり、嬉しく感じます。

「ファカルティ・ディベロップメント」も新たなステージに入りました。昨年度から始まった New Faculty Development Program は今年度、オスマー図書館1階東側エリアやマルチメディアルームを会場として実施されました。特に前者の場所では可動式の机やポータブルのスクリーンなどを臨機応変に配置しながらセッションが行われ、アクティブラーニングの一例としてのデモンストレーションにもなりました。秋学期を通じて毎週火曜日2・3限を新任教員へのオリエンテーションに充てるというスタイルは昨年度のまま、内容には新たに IT セッションや Moodle ワークショップなどが追加され、より充実したものとなりました。



新任教員オリエンテーション



New Faculty Website

「ICT 活用支援」も精力的に活動を行いました。2018年度は Moodle のバージョンが上がったことにより問い合わせが急増しましたが、新たに追加された機能の積極的活用を申し出る教員も多

く、より発展的なサポートをすることができました。ICU の授業動画をオンラインで視聴できる OpenCourseWare のアップ本数も順調に増加しています。今後は OCW の動画を予習・復習の材料としてさらに活用促進することで、学生の課外学修時間の増加につなげていきたいと考えています。また反転授業や海外の大学との授業交流などのサポートを行っているので、ご興味のある方はぜひ CTL にご相談いただければと思います（これまでのサポート事例については [CTL ウェブサイト](#) にて公開中）。

「セミナー・ワークショップ」としては昨年に引き続き、4月にワークショップ「Google Classroom Introduction」を開催しました。ELA の講師がレクチャーを担当し、プログラムと学部 の垣根を超えて教え学び合うという、良いモデル ケースとなっています。また5月には「Spring Faculty Development Workshop」と銘打って「Writing Effective Essay Questions and Offering Wise Feedback」「Many Uses of MOODLE」などのセッションを開催しました。教育学を専門とする Insung Jung 教授とその研究チームと協働して進めたもので、具体的かつ実践的な内容になりました。なお来年2月には特別学習支援室主催でセミナーも開催予定です。

さらに今年度は English Medium Instruction (EMI) が ICU で開催され、その実務的サポートを CTL が担当しました。「教授言語としての英語」を学ぶこのコースには、本校からも4名の教員が参加しました。この成功を受け、2019年3月にも今年度2度目の EMI トレーニングコースを ICU で開催することになっています。

広い意味では教育支援の一部とすることができるのが「学生調査・分析・研究」業務です。これまで CTL では毎学期末に実施される「授業効果調査」、3年次に実施される「学生学修意識調査」、そして卒業時に実施している「卒業時調査」の3つの学生調査を実施してきましたが、今年度は IR オフィスメンバーと協働で抜本的にこれらの学生調査のあり方を見直すことになりました。さらにアカデミックプランニング・サポートが同じオフィスに移動してきたこともあり、アカデミックプランニングエッセイに含まれていた質問項目の一部を学生調査に組み込むことになりました。重複していた質問の削減や、ワーディングの見直しを行ったことで学生の負担も減らすことができたのではないかと思います。

FD 活動レポート

日本とフィリピンを繋ぐ理解の架け橋を築く

アレン・キム

社会・文化・メディア デパートメント



アレン・キム准教授（中央）、ICU 生
アテネオ・デ・マニラ大学の教員と

フィリピンは、アジアで唯一国民の大半がキリスト教徒である、7,000 以上の島々から成る東南アジアの国です。また、フィリピン人のホスピタリティは、世界において他に例を見ないほどです。Japan ICU Foundation の資金援助により実現した日本フィリピン学生サミット（Japan Philippine Student Summit; JPSS）は、学生と職員の個人個人の繋がり的重要性を強調し、日本とフィリピンの強固な関係を築くパイロットプログラムです。JPSS は、アテネオ・デ・マニラ大学やフィリピン大学の優秀な教員や学生の協力を得て、日本とフィリピンの国際的な認識、相互協力、そして文化的感受性を高めるよう努めました。プログラムの主な目的は、批判的な比較研究の実施、異文化間コミュニケーションスキルの構築、友情を築くこと、および教員や NGO リーダーとの指導機会を生むことでした。JICUF の助成金の一部は、交通費、宿泊費、歴史ツアー、旅の間の食費などに充てられ、選ばれた 5 名の ICU の学生と社会学アレン・キム准教授が 2018 年 3 月 7 日から 15 日にフィリピンを訪れました。

日本とフィリピンは、植民地支配を含む歴史の深い傷跡があるにもかかわらず、強固な関係を築いてきました。フィリピンは、スペイン、アメリカ、日本の植民地支配を受けています。今日、両国は国際援助、開発プロジェクト、防衛協力、活気に満ちた移民コミュニティなどを通して繋がっていますが、知的にも文化的にも興味深い対照をなしています。2016 年のジェンダー不平等指数

（GII）では、フィリピンは世界第 7 位であったのに対して、日本は 111 位でした。女性の経済活動や社会における役割はとても重要かつ大きく異なっています。日本は集団思考で家父長制であるのに対し、フィリピンは家族中心で女家長制であると言われています。JPSS は、フィリピンについて直接学び、新たな友情を築くと共に、両国における文化的感受性と相互協力を促進する第一歩となるプログラムです。

この目標に向け、JPSS の学生は出発前に ICU のダイアログハウスで行われた会議に出席し、フィリピンの教授による「フィリピンにおけるジェンダー、持続可能性、および先住民の伝統」についての講演に参加しました。ICU の学生はこの機会を活用してフィリピン大学の教員と会い、フィリピンの多様性と豊かな伝統を直接学ぶことができました。学生は、「イフガオにおける女性と伝統的な農業知識の保全」、「フィリピンの木彫りの伝統における女性の役割」、「気候変動と農民の性役割への影響」など様々なテーマについて学ぶことができました。フィリピンでは、アテネオ・デ・マニラ大学やフィリピン大学のディリマン校やバギオ校で講義や円卓会議に参加しました。さらにフィリピナス・ヘリテイジ図書館、アヤラ博物館、アテネオ大学のリザル図書館、フィリピン大学バギオ校のコレディジェラ博物館、アボン

（Japan Philippine Foundation および日系コレディジェラ人）、バギオ市、そしてコレヒドール島などを訪れ、フィリピンの歴史、文化、現代の問題について学びました。参加した学生が以下に述べているように、JPSS は文化的感受性、両国の国際的な認識、そして両国の絆を築く基礎になりました。JPSS の円滑な運営は、旧 ICU OYR 大学院生の Angela Louise Rosario（現在、アテネオ・デ・マニラ大学の教員）が積極的に参加し、フルタイムの指導を行うことによって実現しました。

また、ICU がもたらした影響も、ICU の学生による振り返りに色濃く現れています。おそらく最も印象的だったのは、JPSS メンバー同士や、とても温かく優しいフィリピン人のゲストの方との間に生まれた絆です。変形学習での感情的な繋がりと集中的な交流が JPSS を通じて実現し、それは参

加者のコメントにも現れています。



University of Philippines Integrated School の授業見学

Maria Matsuki - 1 年

プログラムで最初に学んだのは、貧困の中で生活する家族からの感謝の気持ちです。プログラム 2 日目、アテネオ・デ・マニラ大学の学生が Park 9 とも呼ばれているマニラにあるスラム街に連れて行ってくれました。村を下ると、汚い床の上でメンコで遊んでいる子供達や、蠅が舞う中で魚を売る家や、ゴミで汚れた川などの光景が目に入りました。そこでは、3 人の子を持つお母さんにインタビューする機会があり、息子たちが学校でいじめられることを恐れていることや、学校を卒業させることが最優先の課題であることを語ってくれました。彼女自身が、十分な教育を受けることができなかったのですが、貧困を脱する方法の 1 つが教育であることを知っています。生活は裕福ではありませんでしたが、家族の存在や息子たちを育てる喜びから幸せそうでした。私自身は自分の生活に感謝していますが、子供の教育のためにあらゆることを常に犠牲にしなければならない人たちがいることを考えたことがありませんでした。教育は特権であること、そしてこの体験を通して、自分が受けた恩恵を還元することや、笑顔などの些細な事でも感謝の意を表することの重要性を悟りました。

プログラムで学んだもう一つのことは、日比関係とその問題についてオープンに議論することです。アテネオ・デ・マニラ大学では、第二次世界大戦と慰安婦の問題について話し合いました。日本では、このような論争を招く問題については議論しにくいのですが、フィリピン人の学生や先生方は積極的に意見を述べてくださったおかげで、私たちもこの繊細な問題に対する考えを述べることができました。また、日本軍の兵士に強姦された女性、Maria Rosa Luna さんの日記を読み、日本

の教科書で検閲された写真を見る機会もありました。こうした問題について話し合うことを恥ずかしく思うのではなく、心を開いて人の意見を聞くことが大切であると知りました。

JPSS では、様々な観点から探り、交流し、問題解決を行うことができました。例えば、教育などが抱える課題は、政府が対策を取ってくれると信じていました。しかし、フィリピンなどの国では政府と国民の関係性は良好とはいえません。主たる援助国の 1 つである日本を含め、国際開発機関は、インフラよりも貧困対策に尽力すべきだと思います。例えば、子供が家に帰って勉強ができるよう、貧しい人々のための公営住宅の建設、あるいは郊外により多くの図書館を建設するために、予算は使用されるべきだと思います。フィリピンの貧困率は非常に高いため、若者の人数が多々でも、その若者がしっかりと教育を受けなければ経済発展は望めません。JPSS は、国際開発援助に関わる世界銀行のような組織で働くことに関心を持つきっかけにもなりました。

JPSS プログラムは、私にとって衝撃的な体験でした。フィリピンで出会った学生との交流は一回限りにとどまらず、今も連絡を取り合っています。またプログラムが多岐にわたり、多くの学習分野を対象にしている点をととても気に入りました。例えば、フィリピンの歴史や第二次世界大戦、フィリピンのアーティスト、ジェンダーの役割や、貧困問題、フィリピン人の出稼ぎ労働者などの現状の課題などについて学び、大学や学校の子供たちを訪ねることで、彼らの大学生活・学校生活を体験することができました。このプログラムは、グローバルな視点から、学生である私たちにも地域社会やより広い世界のためにできることがあることを知る良いきっかけになったため、ICU 生に強くおすすめします。

Moe Hoshino - 4 年

(アテネオ・デ・マニラ大学、交換留学経験者)

今日 (3 月 12 日) まで、主にバギオにおける先住民族の文化と日比関係について様々な学びを経験しました。この 2 つのトピックをとりあげた理由は、昨年アテネオ・デ・マニラ大学に交換留学した時、都市部の貧困と教育についての理解は深まったものの、先住民族の文化や日比関係のテーマについては学びきれなかったからです。

先住民の文化について、特に関心を持ったのはコルディジェラについてです。フィリピン大学バギオ校のコルディジェラ博物館を訪れ、専門家の話を聞くことによって、知識を深め、フィリピン

の先住民民族に対して私が持っていた固定観念などを正すことができました。例えば、スペイン人の到来まで、フィリピンには階級社会がなかったと留学中に教わったのですが、富に基づいて階級が分類されていた先住民社会において、この説明は適切ではありません。資本主義社会とは異なるものですが、社会の公平性を保つためのメカニズムが存在し、餓死者が出ないような仕組みになっていたのです。富裕層は搾取者ではなく、資源を管理するコミュニティのリーダーという位置付けでした。

先住民社会について学ぶことに比べ、日比関係は、私にとってはまったくの新しい分野でした。フィリピン留学中は、日比関係の観点からフィリピンの歴史を学ぶ機会はほとんどありませんでした。明治時代にはフィリピンに新天地を求める日本人移住者がいたことを知り、驚きました。現在の日本経済の地位からは想像しにくいことです。JPSS は、フィリピンに住んだことがないが、ICU の交換留学制度を通して留学してみたいと考える学生にとって、素晴らしい集中入門プログラムであったと思います。フィリピンと ICU との繋がりは長らく十分に活用されていませんでしたが、徐々に ICU の学生の中でフィリピンに対する関心が高まってきています。そのような中、フィリピンの大学に実際に出席することが難しいのは、オンライン上の情報不足や、フィリピンに関する直接情報が不足していることが原因と考えられます。このプログラムにより、このような熱意のある学生を危険な状況に晒すことなく、フィリピンの安全予防措置について伝えることができます。また学生がすでに地元の学生との繋がりがあの場合、それは協力を求め、友人となる人がいるということです。

Miki Takahashi - 2 年

JICUF により実現したフィリピンへの旅は、あまりなじみの無い文化について学ぶだけでなく、日本にいては目の当たりにすることができない既存の社会問題をこの目で見るができる素晴らしい機会を与えてくれました。フィリピンの慰安婦について学んだ経験から、この問題は、ある 2 つの国の関係を悪化させる政治的な問題としてではなく、ある個人の悲劇的な体験談として取り上げられるべきだということ、そして、学校で学んだことのすべてを真実として捉えるべきではないということを学びました。日本では、戦時中の慰安婦の問題の存在についてはあまり教えられず、また取り上げられたとしても、多くの場合は韓国にお

ける慰安婦の問題についてです。さらに、この問題を日本人が責任を感じるべき出来事として扱われることはめったにありません。この教育の欠如と様々な視点が、滞在中に得ることができた 2 つの教訓です。

第二に、フィリピンの文化は私に重要な教訓を教えてくださいました。フィリピンで参加したある会議で、フィリピン人の発表者が、すべてのフィリピン人は「**knows how to smile** (ほほ笑み方を知っている)」と言っていました。当時、私は彼女の言う「ほほ笑み方を知っている」ことの意味、ましてはその重要性についてわかりませんでした。しかし、フィリピンに滞在し、現地の方々とコミュニケーションを取り共に過ごす中で、笑顔が持つ力を実感しました。笑顔は、困難な時の原動力になり、他の人を励まし、力づけることもできます。日本人は、特にフィリピン人に比べてあまり笑顔ではないので、笑顔の文化から学び、もっと笑顔になるべきだと思います。言い換えれば、深刻に捉えすぎることは、すべての状況で使える万能な行動ではないということです。

第三に、フィリピンで過ごした時間を通じて、教育の重要性を実感しました。また、学校に行かないストリートチルドレンを目の当たりにしたことで、教育制度の欠陥に関する疑問が生まれました。子供たちを支援し、学校に行くように促す組織が必要です。これはほんの小さな一歩かもしれませんが、社会に変化をもたらすことができると信じています。フィリピンで過ごした中で、この他にも本当に多くのことについて学ぶことができ、社会の構造を見つめる良い機会になりました。日本にいたら得られなかった無数の体験ができたおかげで、プログラムを満喫することができました。フィリピンの文化と歴史に対する理解を深めるだけでなく、人々の温かさに触れるため、また必ずフィリピンを訪れたいと思います。

Angela Louise Rosario - 2016～2017 年度 ICU OYR

JPSS は、日本の学生に積極的にフィリピンを紹介し、さまざまなアクティビティを通じてフィリピンの社会、文化、歴史を学生に体験させてくれる数少ないプログラムの一つです。この貴重な機会に、自分が現在通うアテネオ・デ・マニラ大学と、母校であるフィリピン大学バギオ校に ICU の学生を迎えることができ、光栄でした。どちらの大学の関係者も、JPSS をホストし、みなさんの旅の計画に貢献できたことを嬉しく思いました。

JPSS に参加した学生たちは、初めて会った時は内気で不安そうで、大人しくありつつも、好奇心

旺盛だと感じましたが、プログラムを共にする中、そのような内気な学生たちが徐々に変わってゆき、段々自信を持って自分の意見を述べるようになったのです！8日間のプログラムで人を変えることができるなんて、なんと素晴らしいことでしょう。これは、JPSSのような短期間のプログラムが持つ、人々に与える影響を如実に示していると思います。どこに出かけても、学生たちは、ホストしてくださった方々、出会った方々、そして私にも、フィリピンの文化、歴史、そしてとりわけ社会問題について質問するようになりました。質問したいことや議論したい問題が山ほどあったようです。私は、自分の母国にこんなにも興味を持ってもらえることがとても嬉しかったです。



フィリピン大学バギオ校の学生に
温かく迎えられるICU生

また、主任教員である Allen Kim 教授が学生の成長・発展と学生福祉に意欲があり、気を配ってくださりとてもお世話になりました。JICUF が助成金を通じて与えてくださった機会により、プログラムの開催が実現しました。JPSS は、参加した学生ばかりでなく、彼らを受け入れた大学やサポートした人々にとっても有意義なプログラムでした。相互協力や理解を通して、JPSS 参加者とフィリピン人学生の間には友情が生まれ、ICU とパートナー大学との関係も強化されました。これはチームの努力、熱心さ、そして協力によって JPSS に成功がもたらされたことを示しています。

参加者の人生に何らかの足跡を残せたことを学生から聞き、JPSS の運営やサポートに携わったことはすべて非常に貴重な経験だったと思います。JPSS を通じて学生に影響を与えられたことは、私にとって素晴らしい経験となりました。フィリピン人の元 OYR として、JPSS の学生と行動を共にし、彼らに母国を紹介することができ、とても嬉しく思いました。

Moodle3 新機能のご紹介

浅野 あす香
学修・教育センター

本学で利用している学習管理システム **learning management system (LMS) Moodle** は 2018 年冬学期より version3.5 にアップグレードいたしました。

Moodle の利用を開始した 2010 年冬学期にはコース登録は 106 コースでしたが、2018 年春学期には 179 コースが登録され、教員の約 60%に利用されています。



授業資料をアップロードし学生に配布する、または課題を提出するという機能は Moodle の多くのコースで活用されていますが、今回はさらに Moodle を活用いただくため、3.5 の新機能をご紹介します。また、アップグレードに伴い従来のコースリクエストを廃止し、より簡単にコース準備ができるようになりました。コース利用方法についても、あわせてご紹介いたします。

■Moodle3 新機能のご紹介

出席管理機能

コースへのログインを記録し、学生の授業出欠を Moodle 上で管理できる機能です。自動・半自動・手動の3種類の設定方法から選択できます。

出席設定でグレードオプションを指定すると、コース内の他の評定課題とあわせて、コース評定に加算されます。

Automatic	学生がコースにアクセス（ログイン）すると自動的に出欠を記録。
Semi-Auto	キーワードを指定し、リアルタイムに出席を確認できる方法。 学生はコースにアクセスした後、出席のリンクをクリックし、キーワードを入力する必要があります。
Manual	教員が点呼をとりながら、Moodle に出欠を記録していく方法。

「自動 (Automatic)」は、学生が該当の

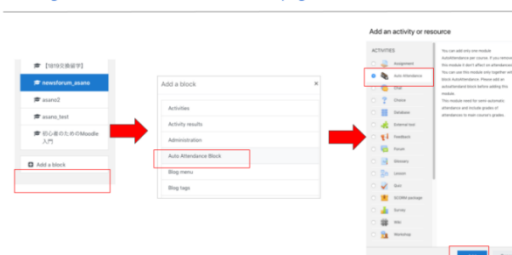
Moodle コースにアクセス（ログイン）するだけで出欠が記録される大変便利な機能なのですが、本学ではパスワードや時間を指定する「**半自動 (Semi-Auto)**」または「**手動 (Manual)**」を推奨しています。

2018 年夏に本館の Wi-Fi 工事が行われ、大教室の授業での活用が期待されますが、Moodle はどこからでもアクセス可能なオンラインツールとなりますので、「自動 (Automatic)」での正確な出欠確認は難しい状況です。現在の本学の環境では学生が遠隔から出席を登録する可能性を完全に排除することは難しく、この点をご理解いただいた上でのご利用をお願いしています。

「出欠モジュール 設定方法」

1. コースに出席ブロックを追加する
2. + Add Activity で Attendance をコースに追加

Adding an Attendance block to a course page



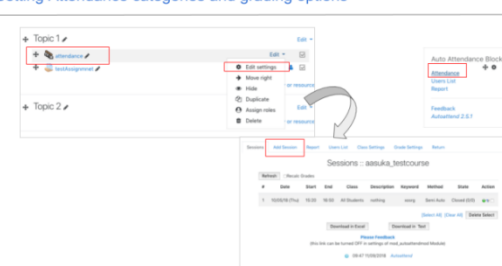
- ### 3. 出席のタイプ、授業スケジュールを設定する

Adding sessions



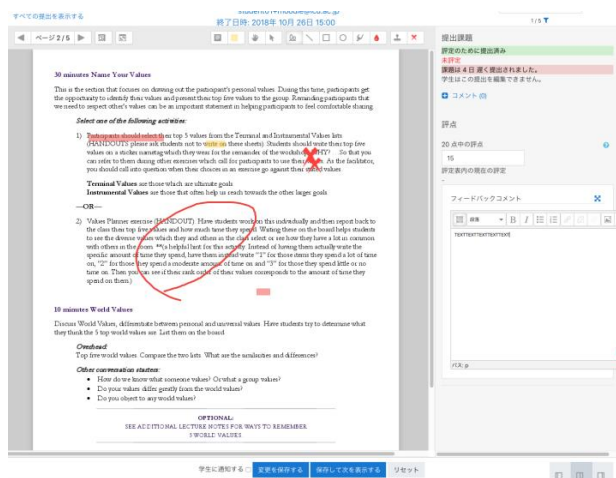
- #### 4. 出席のカテゴリーやグレードを設定する

Setting Attendance categories and grading options



課題のオンラインレビュー機能

提出されたアサインメントに直接レビューやコメントを書き込むことができ、学生に返却できる便利な機能です。



[利用方法]

1. 課題の設定画面で以下を選択（教員）
 - ・提出タイプ：「ファイル提出」又は「オンラインテキスト」
 - ・フィードバックタイプ：「PDF 注釈」

▼ 提出タイプ

提出タイプ ☐ オンラインテキスト ☒ ファイル提出

語数制限 ☐ Yes

最大アップロードファイル数

最大提出サイズ

許可されるファイルタイプ

▼ フィードバックタイプ

フィードバックタイプ ☒ フィードバックコメント ☒ PDF注釈 ☐ オフライン評定ワークシート ☐ フィードバックファイル

コメントインライン

2. アサインメント提出（学生）
3. PDF に Review を記入（教員）
4. 学生に返却（教員）



学生が提出したアサインメント（PDF）に上記のツールを使って、マークをつけたり、直接書き込むことが可能です。同じ画面内で評定やコメントも入力でき、矢印をクリックするだけで次の学生のレポートが表示されるため、レポート添削時間の短縮が期待できます。現在は PDF で提出された課題、Web 版 Moodle でのみ利用できる機能となります。

コース利用の流れ（2018 年冬学期以降）

2018年冬学期からコースリクエストが不要になります！

Moodle 3.5 コース利用方法

• Moodleにログイン <https://moodle.icu.ac.jp/>

担当コースはMyCoursesに登録されています！

*一部コースを除く。コース登録時期については別途ご案内します。

利用を開始するには

1. コース表示設定を「Hide」→「Show」
2. Enrolment Key を設定
3. TAの登録

2018 年冬学期より従来のコースリクエストを廃止し、より簡単にコース準備ができるようになりました。

開講予定のコースは学期前に Moodle 上に準備され、Teacher 登録されているコースは、ログイン時にマイコース一覧に表示されます¹。コース内で「編集モードの開始」をクリックするとすぐに編集できます。学生は閲覧できない設定となっていますので、コースを利用される際には、以下 3 つの設定をお願いいたします。

- 1) コースの表示設定を「Hide」から「Show」に変更
- 2) Enrolment Key（必要に応じて）
- 3) TA の登録

コースが登録されていない、授業以外のコースを作成したい、または、2018 年秋学期以前のコースをバックアップ、リストアしたい場合にはコースリクエストフォームから申請をお願いいたします。新しいコース利用方法について、お気づきの点等ございましたら、お気軽にお問い合わせください。

今回ご紹介したコースの利用開始方法や詳しい設定方法は [ICU Moodle3](https://moodle.icu.ac.jp/) に掲載されています。

CTL（オスマー図書館 1F）でもご質問を受け付けておりますのでお気軽にお立ち寄りください。開室時間 9:00 - 16:00（昼休み 12:00 -13:00 を除く）

¹ 一部のコースを除く。コース準備の時期については別途ご案内いたします。

セミナー研修レポート

OXFORD EMI トレーニングプログラムの開催

2016年よりICUでは、イギリスのオックスフォード大学で開催される English Medium Instruction (EMI) トレーニングプログラムに毎年1名の教員を派遣していましたが、今年度は、オックスフォード大学から講師の先生方にお越しいただき、ほぼ同じ内容のプログラムをICUで開催することができました。8月20日(月)から24日(金)の5日間にわたるこのプログラムには、本学の教員4名を含め10大学から17名の先生方が参加されました。

OXFORD EMI プログラムのディレクターである Dr. Julie Dearden、そして参加された先生方からのメッセージをご紹介します。

なお、大変好評だったこともあり、今年の3月にも同じプログラムを開催予定です。



■ICUでのEMI開催にあたり

ジュリー・ディアデン
OXFORD EMI TRAINING ディレクター

まず、Oxford English Medium Instruction (EMI) Courses for University Lectures のコースを開催してくださったICUに感謝申し上げます。コースには全国10大学の教員がICUに集まり、共に学びながらEMIの経験をシェアしました。参加した大学は国際化に取り組んでおり、専門科目の授業は英語で行われています。

本コースでは、大学レベルのEMI講義をどのように教えるのか、また学生の学びを促進する、より包括的かつインタラクティブな講義の設計方法などについて学び、加えて以下の日本の著名な学者の方々によるレクチャーも行われました。早稲田大学の Emi Sauzier-Uchida 教授は、早稲田大学におけるEMI実施の取り組みについてのレクチャーを行ってくださり、同大学の政治経済学部におけるEMIコースの準備のための英語教育について

のケーススタディについて取り上げられました。また、明治大学の Annette Bradford 教授には、日本におけるEMIの現状についての洞察に満ちたレクチャーを行っていただきました。Bradford 教授は、EMIに関する文部科学省の方針と、このような方針がどのように大学の教室に実際に取り入れられているのかについてお話いただきました。研究員講師のお二人による、コースへの貢献に感謝申し上げます。

コース最終日には、1週間で学んだ教授テクニクの理解力と授業への応用力を示すため、参加者全員でお互いにミニレクチャーを行いました。参加者の皆様によるEMI授業やお互いにサポートし合う姿にとっても感銘を受け、また全国から集まった大学教員の方々同士の繋がりが生まれたことも、とても嬉しく思います。今回生まれた友情と繋がりがこれからも続くこと、そして日本の大学の国際化が進む中の、参加者の皆様のますますのご活躍を願っています。

(日本語訳: CTL)

■実際にプログラムに参加された先生の声

オリビエ・アムール＝マヤール
人文科学デパートメント



～より高度な学生の学びをサポートする教員のためのキャパシティ・ビルディング～

2018年8月、ICUは1週間限定でオックスフォード大学のEMIプログラムの開催場所となりました。

プログラムのディレクターである Julie Dearden 氏とシニア講師の Tom Spain 氏には教育における「less is more (少ない方がいい)」の考え方を教

まりました。

「count elephants (象を数える)」方法では、一方的に話す時間を減らして学生自身で学ぶよう促すことを学びました。私は、トレーニングで学んだ様々なテクニックを、秋学期に担当した 70 人以上の学生が参加している「Introduction to Film Studies」という新しい GE コースで使ってみることにしました。以下は、その簡単な体験記になります。

- ・ GE コースごとに異なるが、基本的に授業はほぼすべてパワーポイントを使用したレクチャー形式で行われる
- ・ 学生達は一方的に授業を聞き、標準化された形式で課題を提出することに慣れているため、今回のように成績が最重要ではない評価方法は、学生を怖がらせた

EMI プログラムの実施は容易ではありませんが効果的です。授業に EMI プログラムを取り入れていても学生がそれに気づかない場合もあります。ただ、次のように学生に求められるものも高度になるため、講師が新しく設定した要求に対応するのに苦戦する学生もいます。

- ・ 学生は、チームワークが具体的に何かを学ぶ助けになると信じていない
- ・ 自分の能力に自信がない学生に対しては、新しい教授方法が必要

学生にブルームの分類法を紹介し、ピラミッド型である意義について考えてもらいました。上達するには、「Remember (記憶)」「Understand (理解)」「Apply (適用)」だけでなく、「Analyze (分析)」「Evaluate (評価)」および「Create (創造)」の3つも適用することが求められます。たまに、すぐ「Analyze (分析)」「Evaluate (評価)」「Create (創造)」ステージに移行し、上位 3 つのスキルレベルを習得しようとする際に重要なリソースが足りず挫折する学生もいました。ですが、上位 3 つのスキルは、最初の 3 つのスキルをしっかり習得してからでしか獲得できません。そのため、課題図書を読み、記憶することは、学習において非常に重要です。

EMI のテクニックに基づいて、教師は学生が最初に感じる恐怖や沈黙に注意を向ける必要があるため、コメントシートを使用したコースについての様々なフィードバックが必要です。

ただし、EMI プログラムでは教師がすることはない、というわけではありません。教師の仕事は授業とは別にまとめられ、以下のように主に授業外で行われます。

- ・ グループが作成した資料の確認

- ・ 同じ質問に対する様々な回答のまとめ
- ・ 誤解や解釈の間違いを明確にし修正する

さて、「count elephants (象を数える)」とはなんなのでしょう。ゆっくり「count elephant (象を数える)」ことは、教師が気長に待ち、学生が恐れずに回答できる余裕を作るための一種の手法です。つまり、この「象」は、教師と学生にとっての新しい最高の味方と言えるでしょう。

(日本語訳: CTL)

福田 哲哉

リベラルアーツ英語プログラム



私は 10 年以上にわたって英語関連科目を英語だけで教えておりますし、この問題に関する知識も書籍や講演会によっていくらか有しておりました。しかしこのプログラムの先生方は非常に深い知見と実践的な教案をお持ちだったので、さらに知識を深めることができました。また既に EMI の教育を実践しておられる他の参加者の先生方からも、多くのことを学ぶことができました。

特筆すべきなのは、日本の大学の例から多くのヒントを得られた点です。日本の大学の中に EMI の成功事例があるのであれば、他の大学も導入に成功する可能性はあるはずです。このプログラムでは他にも、自分とは異なる分野の先生とチームを組んで教えることが、知的刺激にあふれる楽しい経験であることが分かりました。プログラム最終日でのプレゼンテーションでは、他の大学のコンピュータ科学の先生と模擬レッスンを行いました。得難い経験になったと思います。

この点では、他の先生方に比べると英語教員の方が、学生の言語レベル、双方向型授業の教授法、外国語学習の心理などに対する知識が豊富なので、EMI に対する様々な貢献ができるのではないかと思います。もし将来 ICU がこのプログラムに参加者を派遣する場合、1 名であれば言語プログラムではない教員が、もし 2 名以上であれば、そのうち 1 名は英語の教員という割合が望ましいのではないかと思います。

直井 望

心理学・言語学デパートメント



心理学・言語学デパートメントの直井望です。ICU で 8 月に 5 日間にわたり行われた **Oxford English Medium Instruction (EMI) Courses for University Lecturers** に参加しました。このプログラムは英語を用いて専門的な内容を教える大学教員を対象としたトレーニングプログラムです。プログラムの内容は、EMI の理論的背景から講義中の話し方、講義資料の作り方、講義をインタラクティブにする方法、学生の理解を確認する方法など多岐に渡りました。また、他の受講生とペアになってミニレクチャーを行ったり、グループワークで今までの EMI での苦労や解決方法を共有したりすることで実践的に EMI を学ぶことができました。

私は昨年度から心理学の入門授業と、専門である神経科学の授業を英語で開講しています。日本の大学を卒業し、博士号も日本の大学で取得している私にとって、英語で授業をすることは本当に大変です。日本語の何倍も授業準備に時間がかかり、学期中はほとんど寝られない日々が続きます。

Oxford EMI Training を通して自分の授業をよいものにしていくための知識を得ることができました。この知識を実践することが最も重要であり、かつ難しいところですが、学んだ技術を実践してみてもその効果を検討してみるということは、実験心理学を専門とする研究者としてやりがいを感じて取り組んでいます。

Oxford EMI Training の講師である **Dr. Julie Dearden** と **Mr. Tom Spain** には深く感謝いたします。また、学びを支援してくださった **Alberg** 先生と **CTL** のスタッフの方々にも深く感謝申し上げます。

佐藤 千津

教育学・言語教育デパートメント



着任 1 年目の夏が終わり、秋学期になれば英語開講の大学院科目を担当することになっていました。そのため、多様性のある大学において英語で授業を行うことについて少し実践的に学んでおければよいかなと、後になって振り返ると、この機会を当初はかなり漠然と捉えていたのですが、研究に裏打ちされたプログラムの内容は想像以上でした。なかでも新しい学習形態や指導スキルの体験的な学習や、教室での実践を机の上に模型を使って再現して分析的に捉え直す学習などは、教育学が専門の私にとってはわくわくする内容でした。受講後は、このプログラムで学んだことを授業で実践するとともに、日本語開講の教職課程科目においてもそのエッセンスを学生に教え伝えています。

夏は 8 時間の時差があり、直行便でも 12 時間程のフライトを要するイギリスはやはり遠い国です。しかし、今回のプログラムは講師の先生方が日本に来て教えて下さるというもので、本当に貴重な機会でした。逆に、講師のジュリーとトムは夏の暑さが残る東京で疲労もあったことと思いますが、少しも感じさせず、常に明るくあたたかい雰囲気を自然に作って下さったので楽しく学べました。この点も見習いたいと思い、実は密かにお二人の授業中の発話など行動にも注目していました。

この貴重な機会を与えて下さった **CTL** のオルバーク先生をはじめ、**ICU** の皆様に心からお礼を申し上げます。

関連 URL

・ [EMI Course for University Lecturers \(ICU\)](#)

EMI に関する過去の記事

・ [FD Newsletter Vol.22, no.2](#) 峰島知芳 先生

・ [FD Newsletter Vol.22, no.1](#) 金子拓也 先生

コラム

スマートフォンについて — 「Out of Sight, Please!」

ガイ・スミス

リベラルアーツ英語プログラム

ELA の Academic Reading and Writing (ARW) の授業時間の大半は、教科書のアイデアの批判的なディスカッションに充てられます。ディスカッションは、教科書をより深く理解するのに役立つだけでなく、ライティングの課題に向けて自分のアイデアを構成することにも役立ちます。学生たちは、その後もかなりの時間をかけてピアレビューセッションで執筆した文書についてディスカッションを行い、お互いのアカデミックライティングのスキルを高めるため切磋琢磨します。このように、対面でのディスカッションや交渉、およびお互いのアイデアに対する批判的な評価やリフレクションなどは、リベラルアーツ教育の伝統を踏襲している ELA において重要な役割を果たします。

最近、スマートフォンの存在がこのようなディスカッションの質と深さに及ぼす影響について考えるようになりました。スマートフォンはしまっておいた方が良くと漠然と考えていたため、気になる時だけ、しまっておくよう指示していました。そのような中、携帯電話を出さない学生と、机の上に出したままにしている学生がいることに気づきました。スマートフォンを机の上に出している時は、学生はそのスマートフォンの事を考えているのでしょうか。スマートフォン、とりわけインスタグラム、ライン、ゲームに気持ちがむいてしまっているのでしょうか。その可能性はあります。私が担当している ARW クラスは、ペアや小グループでのディスカッションを行う際はスマートフォンをバッグやポケットにしまうよう今年から伝えています。どこか見えないところにしまってもらい、願わくば思考からも追いついてもらうためです。

この問題について、現在行なわれている研究では決定的な結論は出ていないようです。2013 年に発表された「Can You Connect With Me? How the Presence of Mobile Technology Influences Face to Face Conversation Quality」という記事では、携帯電話が存在しているだけで (mere presence hypothesis) コミュニケーションに悪影響があると主張しており、著者は「...モバイル通信テクノロジーが目の前にあることで、人間関係の構築を

妨げる可能性がある ...」 (Przybylski and Weinstein, 2013, pg. 8) と述べています。しかし、この「mere presence hypothesis: 単純存在の仮説」を検証したより最近の記事では、スマートフォンの存在による、会話の質や有意義さへの悪影響は見つかりませんでした (Allred, Crowley, Follon, Volkmer, 2018)。別の調査では、スマートフォンが視界に入っている際の会話の満足度にマイナスの影響はなかったものの、「携帯電話があったかどうか思い出してもらった場合、会話の満足度に関する事前調査と事後調査に大きくマイナスの影響を及ぼした」そうです。 (Allred & Crowley, 2017, pg. 22) 最後に、スマートフォンの認知能力への影響に関する 2018 年の研究では、スマートフォンが一種の「brain drain (脳の機能の流出)」を引き起こす可能性があることを示唆しています。言い換えれば、スマートフォンの存在は、「利用可能なワーキングメモリの容量や流動的知性」に悪影響を与える可能性があるということです (Ward, Duke, Gneezy, Bos, 2018, pg. 149)。現状、スマートフォンの存在が対面コミュニケーションに「良い」影響を及ぼしているという証拠はないため、スマートフォンはしまってもらおうというのが安全策のように思います。

「Phones away, please!」

一方で、学生が携帯電話を外に出しているのはどのような時でしょうか。日常生活にインターネットが広範囲に浸透した過去 15 年から 20 年の間で、知識へのアクセス機能の革命は、教師や学生に新しいスタイルの教育への鍵を与えてくれました。強力な検索エンジンを使用してソースを検索してアクセスし、ツールを使用してデジタル文書内の特定の情報をすばやく見つけることができます。そのため、グループプレゼンテーションの準備などで、学生がクラスワークを行っている際にリサーチをしたりデータの正確性を確認する必要がある場合は、携帯電話を使用可能です。スマートフォンを使用する必要があるかどうかを学生自身で判断してもらい、許可を求めてもらうようにしています。ポリシーとして、これはクラスにも伝えています。そのような求められた場合は常に許可しています。

21 世紀の教育における 4 つの C は、Critical thinking（クリティカルシンキング）、Communication（コミュニケーション）、Collaboration（コラボレーション）、そして Creativity（クリエイティビティ）とされています。これらは、今後より複雑化する、接続された競争の激しい世界で、学生が必要とするスキルです。インターネットやスマートフォンは、教師や学生に創造的な授業を行う時間を与えてくれました。そして、VR などの新しいテクノロジーが、今後も教室環境や学生とのかかわり方を変えていくでしょう。教師は、このような新しいツールに適応し成長する覚悟が必要です。John Dewey 氏が述べた通り、「今日の生徒を昨日のやり方で教えるなら、私たちは生徒の明日を奪うことになる」のです。

参考文献

Allred, R. J., & Crowley, J. P. (2017). The “mere presence” hypothesis: Investigating the nonverbal effects of cell-phone presence on conversation satisfaction. *Communication Studies*, 68(1), 22-36.

Crowley, J. P., Allred, R. J., Follon, J., & Volkmer, C. (2018). Replication of the Mere Presence Hypothesis: The Effects of Cell Phones on Face-to-Face Conversations. *Communication Studies*, 69(3), 283-293.

Przybylski, A. K., & Weinstein, N. (2013). Can you connect with me now? How the presence of mobile communication technology influences face-to-face conversation quality. *Journal of Social and Personal Relationships*, 30(3), 237-246.

Ward, A.F., Duke, K., Gneezy, A. & Bos, M.W. (2017). Brain Drain; the mere presence of one's own smartphone reduces available cognitive capacity. *Journal of the Association for Consumer Research*, 2(2).140 - 154.

（日本語訳：CTL）

編集後記

前号に続き、学修・教育センター（CTL）の機能についてご紹介させていただきました。図書館に拠点を移し、より CTL らしくなってきたと感じていますが、引き続き認知度と支援内容の向上をめざし努力をしていきたいと思えます。

Oxford EMI のトレーニングプログラムは今回初めて ICU で開催することになり、熱心な講師の先生方のレクチャーとプログラムの素晴らしさを間近で感じることができました。講師の先生と参加された先生方からのメッセージをお届けしましたが、ぜひとも一人でも多くの方に実際のプログラムにご参加いただきたいと思います。ご興味のある方いらっしゃいましたら CTL までお問い合わせください。

ご多忙の中、原稿をお寄せくださった皆様、ありがとうございました。

最後までお読みいただきました皆様、記事についてのご意見ご感想などがありましたら、お気軽に ctl@icu.ac.jp までお寄せください。

小林 智子
学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

Othmer Library 1F 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422) 33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp